ここにも街の文化財

西宮歴史調査団 活動報告書

西宮歴史調査団

西宮歴史調査団の18年間

西宮市文化財課顧問　合田茂伸

西宮歴史調査団は2006年3月18日土曜日の結成から18年になる。さらに、先駆「郷土史学習会」は2003年9月20日土曜日にはじまった。調査団結成の翌年度に発行した『西宮歴史調査団年報』（2006年度版）の冒頭にかかげた「西宮の歴史・文化遺産と西宮歴史調査団」には、

市域の不動産的な歴史・文化遺産をすべて調査し記録する

不可能ではない

47万市民が1人1点の資料を調査すれば47万点の資料カードが生まれる

「西宮歴史調査団」が、市民自らが自らの歴史を記述することの端緒となるよう努力

など肩に力がはいった言葉がならぶ。

西宮市の文化財保護の拠点、西宮市文化財課は、この年報刊行の翌月、2008年4月に単独課（第2期文化財課、当時は「グループ」）として新体制となった。西宮歴史調査団は西宮市文化財課とともにあゆんだのである。さらにさかのぼると、「西宮市歴史資料館」構想のもと1982年に最初の文化財保護専門職・学芸員、のちの文化財課長・西川卓志さんが配置されたことで、ようやく西宮市の文化財保護行政が本格的にはじまった。「西宮市歴史資料館」は当初、西田公園に建設する予定であったが、発掘調査でみつかった弥生時代から飛鳥時代までの竪穴住居跡などを現地に保存するために場所を変更した。六湛寺町にあった西宮市立図書館が拡張・移転する計画にあわせ、名称を「西宮市立郷土資料館」とし、市民ギャラリーとともに「西宮市教育文化センター」として開館した。1985年7月10日である。

1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震がおこした阪神淡路大震災では、市民ギャラリー第1〜第4展示室と2階図書館集会室は避難した市民で、1階の文化財課（第1期、1993年〜2001年）会議室（現在の平和資料館）は倉庫になり全国からの支援物資で、それぞれいっぱいになった。この震災は文化財保護行政のおおきな転換点となった。地震によっておおくの未指定文化財（この震災ののち多用されることばとなった）・未知の文化財が、文化財保護にたずさわる機関や研究者にしられることなく破壊され、廃

棄された。これを契機として、神戸大学ほか歴史研究者、学生が中心となって徐々に組織化された「史料ネット」がそののちも各地の災害復旧や平時の文化財保護におおきな役割をはたし、文化庁は直後の1996年に文化財保護法を改正して文化財登録制度を開始した。文化財登録制度には種々の目的、機能があるが、建造物や美術工芸品などの有形文化財、記念物（史跡、名勝、天然記念物）の文化財一覧表を作成し、ひろく保護することを基礎とする。この手法は、現在も文化財保護法で重要文化財等の枠外におかれている「埋蔵文化財」の保護の手法そのものである。「周知の埋蔵文化財包蔵地」という一覧表と地図を自治体が整備し、遺跡をもれなく保護しようとする方法である。

冒頭の「すべて調査する」西宮歴史調査団は、この方法の西宮市版として企図した。

調査団の活動を記録した『西宮歴史調査団年報』（2006年度版から2019年度版まで全14冊）、調査団員の情報交換誌『調査団通信』（2009年2月から2020年8月まで通算121号）、調査活動や成果を速報する『西宮歴史調査団ニュース』（2014年3月から2021年12月まで通算14号）、調査記録を本にまとめた『西宮歴史調査団・調査報告書』（全4冊）をよめば、18年間の調査がいかに膨大で重要なものであるか、がわかる。また、活動報告会、展示・展覧会、歴史ウォーク、ラジオ番組への出演、他市の団体との交流などいわゆる連携事業、普及事業を毎年のように開催した。西宮市立郷土資料館のサーバに保存してある調査団活動記録データを積算すると、初出から現在までの調査団の活動量は、のべ8703人・日、単純な年割りで483人・日／年、日割りにすると、1.32人／日。膨大である。文化財の調査と記録を量として数字のみをあげることには躊躇するが、かろんじることはできない。1.32人／日は、18年間毎日、西宮市内のどこかでだれかが文化財を調査していた、ということになる。

西宮歴史調査団は、おおくの文化財調査成果をのこして2024年度をもっておわる。ながく文化財調査にたずわった調査団団員と調査団をささえてくださったおおくの方々に、うえにかかげた調査活動とその成果をささげ、西宮歴史調査団は解散する。

2024年11月1日

目　次

西宮歴史調査団の18年間 …… 1
身近な文化財を掘り起こして …… 3
調査団の活動報告
　寺院・墓地班 …… 4
　街道班 …… 6
　地蔵班 …… 8
　橋梁班 …… 10
　石造物班 …… 12
　古文書班 …… 14
　竜吐水班 …… 16
　解説会、パネル展で市民にもアピール …… 18
　研修で知識もスキルも高めて …… 24
　みんなで調べた あの日あのとき …… 26
　西宮歴史調査団活動のあゆみ …… 28
　調査団団員名簿・調査団担当職員名簿 …… 32

身近な文化財を掘り起こして

文化財調査ボランティア　西宮歴史調査団

西宮歴史調査団は、平成18年度から活動を始めた市民主体による文化財調査ボランティアです。西宮市内には、無数の歴史資料が点在しています。例えば道しるべや地蔵などの石造物、橋梁・堰堤の土木遺産などがあります。これらの文化財は、未周知のものばかりで、所在情報の収集を急ぐ必要がありました。こうした文化財を悉皆的に調査することを目的に西宮歴史調査団が寺院・墓地班、街道班などの各班を組織して発足しました。

その後、古文書班と竜吐水班も構成され、活動は令和6年(2024)の現在に至るまで継続されています。毎年30名近い市民ボランティアが参加して活動してきました。

活動の内容については、年度ごとに活動報告書を刊行。平成21年度からは毎年、活動報告会で成果の発表を行っています。また現地で調査成果を解説する歴史ハイキングを開き、市民とともに現場を探索するなど、活動の幅を広げてきました。

こうした活動も、令和6年度をもって、いったん区切りをつけることとなりました。現在までに調査された内容は多岐にわたり貴重な記録となって資料保存されております。成果をまとめた刊行物もつぎつぎ発行。現在までに「甲山八十八ケ所」「西宮の地蔵」「西宮の橋梁」「西宮の竜吐水」の4冊が調査団報告として西宮市から発刊されています。

甲山 めぐりめぐって八十八ヶ所

寺院・墓地班

甲山神呪寺の南にある甲山八十八ヶ所の石造物を調査しました。これは江戸時代後期につくられた四国八十八ヶ所を写したミニ巡礼地で、本場四国まで行かなくてもお遍路が出来るという霊場です。札所ごとに本尊と弘法大師像の石造物がまつられているので、サイズを計測し、写真撮影やスケッチをし、銘文を読み解き、それらの内容を調査カードに記録しました。調査期間は結成時から平成 21 年(2009)3 月までの 3 年にわたり、平成 24 年(2012)3 月には報告書を発行しました。　（川上早苗）

★今も続いている信仰

甲山八十八ヶ所は平成 5 年(1993)に西宮市教育委員会による調査が行われています。その後平成 7 年(1995)には阪神・淡路大震災が発生し、さらに十数年を経ての状態を確認するために、文化財調査ボランティア「西宮歴史調査団」が再調査を行うことになりました。

札所ごとに本尊と弘法大師像が台石の上に並ぶのが基本的な形式のようで、台石には施主名などが刻まれています。そのほか石柱や手水鉢、五輪塔の一部などの石造物がある場合もあります。

弘法大師像は、座像のみ・光背付座像・屋根付光背座像などいろいろな様式があったので、作られた年代が長期にわたっているのかもしれません。また砂岩で作られた座像のみは首が折れるなど破損しやすいようですが、セメントのようなものか別の石かを用いて新しい顔が補修されている状態のものがいくつかありました。調査期間中にも仏像に掛けられた赤い前掛けが新調されていることもあり(本来は地蔵菩薩以外には掛けるべきではないと思うのですが)、今でもこの場所で信仰が続いているのだなと分かりました。

山の中に点在する石仏

悩みながら調査中の様子

★山道を３年がかりで

調査一年目は初めての石造物調査でもあり、まずは彫られた文字を読み取るのが大変でしたが、二年目には拓本のとりかたを教わったの

目視でわからないものは拓本をとる

で読める文字も増えてきて、計測の調査も一巡しました。その後は、調査台帳にまとめたときに見つかった調査の不備を確認したり、目視で読めなかった銘文の拓本をとるなど度々再調査に向かいましたが、三年目で無事に調査を終了することが出来ました。

風化した花崗岩の山道は足場も悪く、夏には蚊に刺されながら、冬には霜柱を踏みしだきながら、文化財調査の大変さと面白さを味わいました。また、ある時急に薄暗かった山道が切り開かれて明るくなり、すぐそばまで住宅地開発が迫るのを体験するなど、文化財保護の大変さも感じました。

悩みながら調査中の様子

異体字、梵字…解読に苦心 **団員の感想**

◆「まず最初に行き詰ったことは、二百年の歳月の内に石造物とはいえ、花崗岩の風化と時代による文字の変化でありました。風化状況に対しては、くずし字、異体字、梵字など知識の無さに自信を失いそうになりながら、平素は馴染みのない文字に数多く遭遇しました。その度、何回も何回も見直し解読に挑戦しました。しかし、これらの苦労の中で仲間と解読できた時は喜びと感激です。それは意欲と楽しみを与えてくれました。」

◆「こんなに難しいこととは知らずに参加しました。何が難しいかといえば、字が読めないのです。ブラシをかけたり、水をかけたり、ライトをあてたり、斜めから横から上から下から眺めてみます。でも、字が浮かび上がっても変体がなであったり、くずした字であったりするのです。だから字が読めた時は嬉しい。」

◆「２年目の調査も相変わらず文字に悩んでいる。が、拓本をとることを習った。最初室内で練習した時文字が浮かんでくるのを見て感激しました。しかし現地ではうまくいかない。寒いときは凍りついて紙がはがれない、水分が多くても少なくてもうまくいかない。だんだん慣れてきて読めるものが出てきた。たとえば目で見たときは「木」だったのに拓本をとると「本」であることが分かる。まだまだこの作業が続く。」

◆「古い石仏を調査するのは大変なのは当然で、この調査が終われば四国八十八箇所を満願したと同じ功徳があると思って、今では一生懸命努力することにしています。」

(団員の感想は活動当時の年報より一部抜粋)

歩いた！　見つけた！　記録した！

街道班

古来より著名な社寺が点在し、交通の要衝でもあった西宮には南部・北部地域共に多くの街道が通っており、一部にはその名ごりもあります。街道班は西宮歴史調査団の目的の一つでもある悉皆調査の観点からそれら街道とそれに付随する事物、何でもを平成18年(2006)の発足当初から５ケ年の間、市内の西国街道・有馬街道・山陽道・金仙寺道・中国街道・神呪寺参詣道を調査対象として活動しました。　（髙谷康彦）

★街道とその両側のなんでも

街道班は調査団発足の初年度から５年間活動しました。最初にどのような班を作るかの希望を聞かれた時、西国街道が即浮かびました。街道班が何をするのかイメージもつかみやすく早い段階で決まったと思います。私の場合西国街道が調査対象であることと、歩ける（まだ若かった！）ということが魅力で参加しました。

街道班の調査の主対象は街道とそれに付随するものは何でも（歴史・ルート・変遷、石造物・建築物、伝承・・・）だったので現地を歩かない事には何もできず、歩くことが主目的かのように歩きました。原則としては１年ごとに対象の街道を決めて年度単位で完了することにしていました。やむを得ず翌年度に食い込んだ時もありましたが、ほぼ年度ごとに終えることが出来ました。１年目は市内の西国街道（芦屋市境～西宮神社～市民グラウンド～武庫川ひげの渡し）、２年目は有馬（西宮）街道（西国街道との分岐～仁川～宝塚～生瀬～山口～有馬温泉入口杖捨橋）、３年目は市内の山陽道(市民グラウンド北側～越水町～芦屋市打出)、４年目は中国街道(与古道付近～今津～武庫川）と金仙寺道(船坂～上山口)の２グループにわかれ別々に調査、５年目は神呪寺参詣道３ルート（仁川学院前～上ヶ原～森林公園～神呪寺正門前、神呪寺正門前～目神山～大師道～六軒町、神呪寺正門前～山王町～獅子が口集落～ＪＲ大師道踏切)でした。

道標の調査をする街道班

必携アイテムの腕章

前述のように調査対象は街道とその両側にある何でもということなので既知のものは別にして上下左右をきょろきょろ、路地でもあれば何かないかとのぞき込みながら調査対象を求めて歩いていました。まさに挙動不審者そのもので、疑いを晴らすためでもありませんが郷土資料館から貸与された「西宮市立郷土資料館」と書かれた青い腕章は筆記用具、野帳、カメラ、メジャーなど以上に大切な携行アイテムとなりました。

★「何をしているのですか」

怪しまれたのかどうかは別にして「何をしているのですか」と問いかけられこれこれと調査団のことを説明すると、それならといろんな情報を教えていただくという経験をした班員もいました。歩くことや現地調査が主目的になってしまったようでもあって調査カードがはかどらず担当学芸員の「カードが完成して初めて調査完了ですから」という悲鳴のような叱咤激励を受け

ながら調査カードの完成に精を出したものの、年度をまたがってしまい、翌年度の調査と並行作業になったこともありました。

★いろんな街道を踏破して

調査成果発表の機会でもある年度末の調査報告会は調査団発足後４年目から始まったので街道班としての報告会参加は班４、５年目の２回だけ。また「調査団と歩く〇〇」は街道班解散の翌々年から始まり、そこでは街道班の旧メンバーも調査の成果を生かし、資料作成やガイド役として参画しました。他班のような立派な報告書作成に至らなかったのは残念でしたが、５年間にわたり各街道を踏破し、各種の調査や、ご協力いただいた方々からの聞き取りに基づき、調査カードを作成出来たことは得難い経験となりました。

ルートを検討する街道班

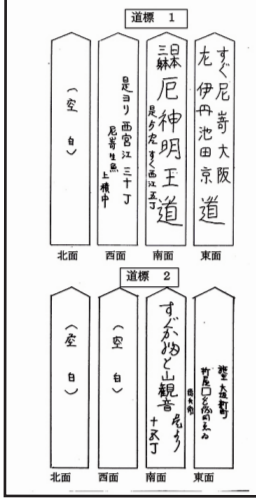
調査中にも対象の変化に気づく事は多々ありましたが、変化の激しい昨今を考えると15年以上経過し、街道を取り巻く状況も変わっていることでしょう。調査団が始まった頃はカメラがフィルムからデジタルに切替わっていった時期で写真が雑になったとの意見もありますがコストのことを気にせず気軽にシャッターを押せるようになったと個人的には思っています。そして昨今ではスマホ他の進歩により調査手法・機器にもデジタル化の新しい流れが生まれ、私たちアマチュアでも扱えるようなものも出てきています。調査団の再発足があるか否かはわかりませんが、次世代調査団ではこれら新技術を縦横に駆使した調査活動が出来れば面白いのではとも思っています。

仲間と持ちこたえあって 団員の感想

◆「わがふるさとのことを知りたいという思いから関わった。見えないものを見抜く力は足りず挫折の日もあったが郷土資料館や仲間によって持ちこたえることができた。」

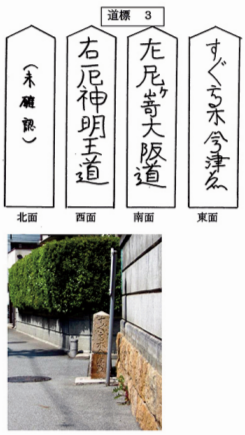
◆「このような調査は初めての経験でしたが西国街道は有名なので道筋も明確と思っていましたところ、かつては街道であったと認識できるものも少ないところも多く驚きましたが皆様の協力により今に残る周辺の歴史を含め勉強する貴重な体験をさせていただきました。」

◆「街道班を選んで２年目の活動でした。みんなの後について歩くだけだった初年度に比べ今回は行程の下調・地誌等の文献調査他自分なりに納得できるところまで準備して臨めたので充実感を持てた活動だったと評価しています。」



西国街道
下大市五叉路付近

これらの道標は
厄神明王（門戸厄神東光寺）
甲山観音（神呪寺）
高木村・今津
尼崎・大阪
への道を示している。



～～ ♪ ♪ おさげと花と地蔵さんと ♪ ♪ ～～

地蔵班

歴史調査団が発足した当初、地蔵班は人気がなく、私を含めて手を挙げる団員は居なかったが、地蔵班を発足させるには誰か一人でも手を挙げる必要があるとの判断で、私が手を挙げ学芸員と二人で調査活動を始めました。その後班員の増減はあったものの調査を終え、平成 25 年（2013）に「西宮の地蔵」を刊行。当時の時点で調査個所は 215 ヵ所でした。（粟野光一）

★地蔵信仰とは？

多分に宗教的な解説が必要になるのでそれは避け、平たく述べると地蔵信仰は日本の浄土信仰の一部で、地獄への恐怖から救ってくれると信じられています。地蔵菩薩は六道の救済の菩薩とされ、六道の世界とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天を指し、現世における行いによって何処に生まれ変わるかが決まると言われ、庶民の間で広く信仰されています。

★六地蔵とは？

６体の地蔵菩薩を並べた像のことで、墓地や寺院の入り口で良く見かけます。

★調査方法

当初西宮市内地図を広げどこからどのような方法で調査を始めようかと途方に暮れたのですが、学芸員からＺ社の住宅地図にお地蔵さんの記号が記されていることを知らされ、それを中心に学芸員と共にお地蔵さん探しの街中歩きを開始しようと思い、先ずは市内南部中心部の西宮神社の表大門（赤門）を背にして東方向の本町から始めた記憶があります。一本一本の道路を、路地から路地を、また新興住宅の坂道を歩き廻る調査でした。

調査はお地蔵さんの所在地、大きさ、陽刻か丸彫か、立像か座像か、持ち物などを記録した上で写真撮影を行い、お地蔵さんを祀っておられる方に経緯などの聞き取りをしました。一石五輪塔を一緒に祀っておられる場合はそれも記録に残しました。

★強く記憶に残っているお地蔵さん２例

１、誰が祀っておられるのだろうか。

［津門住江町］東川左岸の堤防上に、花崗岩にコンクリートで補修され鉄兜状の帽子を被った珍しいお地蔵さんらしくない大変ユーモラスなお地蔵さんが祀られています。

祠は無いのですが涎掛けは新しい物に取り換えられているようで、台石の背面には「昭和 48 年８月建立」の銘が刻まれています。またお地蔵さんの左側には何か分からない石柱一本も祀られ涎掛けが掛けられている時もあります。

地蔵盆の日　津門住江町　平成 20 年８月 23 日

2、お地蔵さんの集合住宅

[屋敷町]森具公園の一角に阪神淡路大震災後新しく建立された大きな祠に39体のお地蔵さんが祀られ、さながらお地蔵さんの集合住宅の体を呈しています。

先の阪神淡路大震災で屋敷町（森具地区）一帯は壊滅的な被害を受け、町域は区画整理で見間違える街になりました。この区画整理により今まで個人宅で、或いは町域で祀られていたお地蔵さん、土中に埋まっていたお地蔵さん、川に埋まっていたお地蔵さんらがこの集合住宅に集められるようになりました。

地蔵尊　屋敷町森具公園の一角　　撮影年月日不詳

★信仰は今も続いています。

西宮神社の表大門(赤門)を背にして東方向を向くと北側の街と南側の国道43号に挟まれたかまぼこ型に盛り上がった西国街道(通称旧国道)沿い、越水町から廣田神社参道前の西国街道沿いには今もお地蔵さんが守られ祀られています。その昔西国街道を旅する人々が旅の無事を祈り心の拠り所としたのではないでしょうか。また、津門日吉筋では3～4か所で地域の方々により丁寧に祀られています。

毎年8月23・24日にはお祀りされている方々が中心となりご詠歌を唱え、先祖の霊を慰め、願い事を唱えながら数珠繰りを行い、子供の健やかな成長を祈る地蔵盆が盛大に催されて来ていましたが、最近はお祀りをされている方々も高齢になり、地蔵盆を催される所が年々少なくなってきているのは寂しい限りです。また、地域にお住まいの方々の心の拠り所とされて来たお地蔵さんが様々な要因により、ポツリポツリと姿を消している現実を目の当たりにすると、如何ともしがたい気持ちが湧き上がってきます。

お祀りをされている世代から次の世代へと受け継がれていくことを願うばかりです。

♪♪おさげと花と地蔵さんと♪♪

♪指を丸めて覗いたら
黙ってみんな泣いていた・・・・
・・・・おさげと花と地蔵さんと♪

昭和32年（1957）　唄：三橋美智也
詞：東条寿三郎
曲：細川　潤一

地蔵盆の日 津門川町　　平成20年8月23日

風土と 歴史と 人情にも 橋を架けて

橋梁班

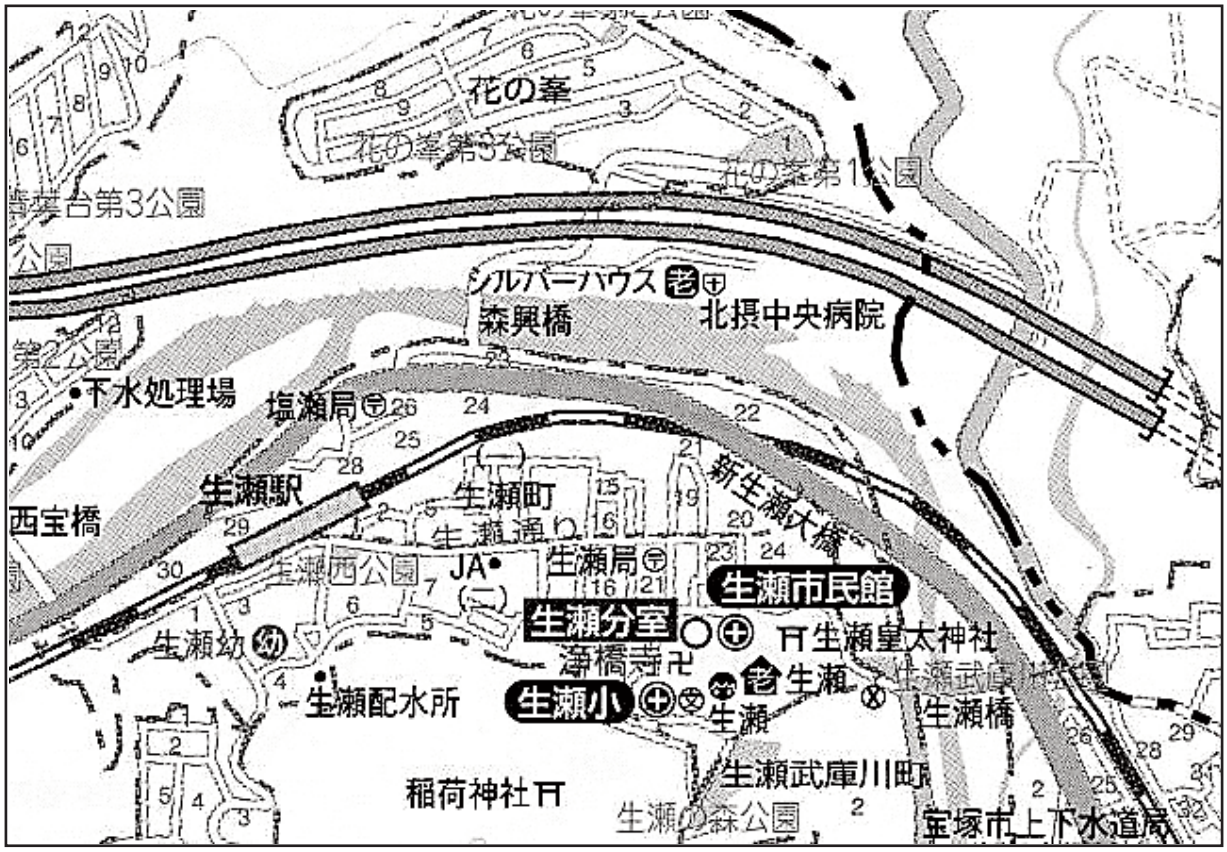
市内を流れる川（83 河川）に架かる橋で、親柱、橋名板のある橋を対象に、その橋の所在地（右岸上流の住所）、橋名板、親柱の形状（採寸と材料）、欄干の形状（採寸と材料）等について現地調査、および橋を含む周辺の写真撮影。これらの調査データを橋ごとに調査カードを作成。橋梁の現地調査は平成 18 年度に２名のボランティアでスタートし、平成 29 年度に８名で調査終了しました。（高橋博己）

★市内最長の橋－新生瀬大橋

通常橋は川の両岸をほぼ真横に一直線に結ぶよう建設・架橋されています。しかし目前の橋・新生瀬大橋は、武庫川を無視するように手前に架かる生瀬橋の東詰めから武庫川上流左手に大きく伸びて、その先は山裾の中に隠れて橋の対岸側は見えなくなっています。

添付の地図から判るように、武庫川のみならずＪＲ福知山線をも呑み込むように建設されています。最初に目にした時、橋の左岸側、右岸側の感覚がなく、自動車専用道路か？と思いました。道路は大型トラックなどが行き交う上下二車線の自動車専用道に付け加えるように、下流側にのみ歩道が設置されています。しかし歩く人の姿はほとんど見ることができません。

その歩道を上流側に向かって進むと、橋の名板に“新生瀬大橋”と表示されており、橋に違いありません。さらに進むと、橋の途中の側壁に出入口が設置されており、中に入ると目前に階段があるのです。この階段を降りると武庫川の右岸、生瀬町に行き着くことができます。



この橋のひとつ上流に架かる森興橋近くに右岸側があります。この新生瀬大橋は、森興橋の右岸側から下流の生瀬橋の左岸まで“ノ”の字を描くように伸び、その長さは約900m近くあるのではないでしょうか？

★橋名板から見える西宮の歴史

西宮市内には多くの河川が流れていますが、調査対象となった83の河川には325の橋梁（橋名板あり）があります。この橋名板を調べると、その橋が架設されている土地と人の様子や歴史を教えられることがあります。

・国鉄有馬線の名残りとどめて

山口町の公智神社近くに、西川に架かる「駅前橋」があります。大正4年（1915）に国鉄有馬線が開通し、この付近に「有馬口駅」があったことが橋名の由来です。昭和18年（1943）に有馬線は廃線となりましたが、「駅前橋」という橋名が残っています。

・夙川橋の名前はあったので

国道2号線の夙川橋＝写真右＝は、大正15年（1926）に建設の阪神国道、現国道2号線の建設に伴い架設されました。同じ夙川に架かる西国街道の橋に夙川橋が既にあったので、阪神国道のこの橋は「上夙川橋」となったといわれています。

・移り変わる橋の名前

六湛寺川の橋に「西夕凪橋」、その東隣の東川の橋に「東夕凪橋」と、西宮酒造㈱（現在の日本盛）の役員・飯田寿作氏が命名したといわれています。しかし平成23年（2011）に、六湛寺川に架かる橋は「六湛寺橋」に、東川に架かる橋は「東川橋」になりました。

・料亭へ いざなう橋

料亭「播半」の女将・乾御代子さんの著書『御代女おぼえがき－大阪料亭ものがたり－』（1988年）に、“そこでまず、木の橋を自動車の通れるコンクリートの広い橋に架け替え、橋の両端の欄干に播半の商標「箪瓢」を並べ、名も「箪瓢橋」とつけました”と記されている。逆さ瓢箪「箪瓢」が並んだ箪瓢橋（御手洗川）は、播半跡近くに現在も存在します。

・引き込み線は残った

惣川に架かる惣川橋の北には昭和38年（1963）まで国鉄の貨物駅「惣川駅」がありました。惣川駅には明治37年（1904）に生瀬地区にあったウルキンソン炭酸工場の製品輸送のために新設された駅で、現在はその引き込み線が残っています。

・「桜橋」の名前は花盛り

津門川に架かる桜橋は、市民の要望によって名前が付けられたといいます。「コミュニティつと」第350号（2018年）に、津門川の仁辺橋から国道2号までの橋のうち1か所だけが無名だったことから、地域の住民が名前を付けてほしいと市に要望してきたとあります。ところで、「桜橋」、「さくら橋」という名前の橋は、津門川に加え中新田川、新川にあるのです。

写真下は津門川に架かる桜橋の左岸下流の親柱

西宮神社にまつわる 3つのストーリー

石造物班

石造物班は、平成21年(2009)4月に発足しました。調査の対象は、市内の神社境内にある石造物です。具体的には、鳥居・玉垣・狛犬・灯籠などになります。石造物の写真撮りとスケッチに合わせ種類、銘文、法量、材質などを一つ一つ記録していきます(調査記録作業)。そして蓄積されたデータからその時代の背景を読み取りストーリーにまとめます。それらのお話を、市民のみなさまとの交流の場をつうじて発信しています(情報交流活動)。 (野中知徳)

★石造物から見えて来る景色

世界ふれあい街歩きは好きな番組です。その中で、それぞれの国の人々や風土、文化に触れることができます。なのに、日本では当たり前に存在する神社という風景は見ることはできません。そうした日本固有の神社を構成する石造物をコツコツ調査記録しています。

時には、石造物の置かれた時代や背景に思いを馳せ、一つ一つのデータをパズルのように組み合わせてみると、わくわくするような景色が浮かび上がります。時には、石造物のほうから謎かけされることがあります。謎かけにはまって迷路に迷い込むこともしばしばです。それでも、好奇心を極めれば思わぬ真実と出会えることがあります。ここでは、市民の皆様との交流の場で行われた3件の少し感動的なお話をご紹介したいとおもいます。

同じ奉納者の名がある五所神社の灯籠＝右＝と西宮神社の灯籠＝左

★西宮神社の石灯籠に誘われて
～私が千葉まで旅した“わけ”～

(西宮市北口図書館 2014年11月14日)

衣笠周司班員は、西宮神社の参道からすこし引っ込んだところにぽつんと立つ、ごくありふれた石灯籠の調査にとりかかります。ところが、そこに刻まれている「上総国蓮沼村」の文字にくぎ付けになります。果てしなく遠い村からの謎かけのメッセージです。年号は元禄2年(1689)江戸時代中期、石造物ではなかなか見つからないレア物です。奉納者には乙馬や葛馬など西宮でよく見かける名前が刻まれています。

さてさて、随分思いあぐねた末に、遠く上総国に向けて心震わせる旅のはじまりとなりました。たどりついたのは蓮沼にある五所神社です。サイトをみると太平洋の海原、九十九里浜に向けて立派な鳥居が立っています。豊かな木々に囲まれた物静かな境内がつづいています。なんということでしょう、その境内の石灯籠に確固たる答えが刻まれていたのです。

奉納者に西宮神社の石灯籠と同様の名前が並んでいました。当時、西宮の漁民と蓮沼村の漁民は九十九里浜の地引網漁、特にイワシ漁で交流があったことがうかがえます。底子一枚下は地獄。どこの漁場でも漁師さんにとって神様は命の綱なのでしょう。米作りは一所懸命に土地にしがみついて暮らしいるのに対し、漁

師は魚を求めて時には果てしなく遠い海原へ乗り出すのですね。

そびえ立つ双子の石灯籠

★この巨大な、双子石灯籠はまるで広告塔

（西宮歴史調査団と歩く西宮神社 2016年 10月8日）

毎年、話題となる『福男選び』のスタートの門である赤門をくぐるとすぐ左に、巨大な双子の石灯籠が基壇の上にそびえています。なんと、高さが4m40cm。広い境内の中でよく目立っています。まるで広告塔のように。

この広告塔に取り組んだのは荒木知班員です。熱い郷土愛好家です。石灯籠の設置は天保7年(1836)、奉納者には酒造家を中心にそうそうたる名士が並んでいます。まるで石に刻まれた天保の人名録です。その中で、当時、庶民の娯楽の中心だった歌舞伎と相撲の著名人の名前もでてきます。4代目中村歌右衛門と大阪相撲の関脇、三保ケ関喜八郎(三保ケ関部屋3代目／西宮出身)です。歌舞伎の源流である能と相撲は神様への神事からはじまりした。

そして、石の上にも愛情を。手掛けた持ち場は作業をするうちにだんだん愛着が湧いてきます。荒木さんは、寺に残されている宗門人別改帳(戸籍原簿)にまでさかのぼり刻まれた名士の事績をたどりました。荒木さんのお話は、とつとつだけど熱い語り口調に人気があり、この日の説明会で、広告塔に寄り添って語り掛ける姿はとても印象的でした。

粟野班員の綿密な説明に聞き入る参加者

★商売繁盛、近代西宮における生業の風景

（西宮歴史“発見”物語 西宮市立北口図書館
2016年12月2日～2017年1月15日）

西宮神社には個人や団体から奉納された、たくさんの石灯籠が立ち並んでいます。粟野光一班員は調査団の生え抜き、綿密さとしぶとさでは右に出る人はいません。数多くの石灯籠の調査記録を進めるうちに、当時の商業組合からの奉納の多さに気づきます。さすがに商売繁盛の神様ですから、ご利益がありそうです。当時、羽振りの良かった業界がわかります。

「古手屋中／古着屋さん」、「道具屋中／古い生活道具や古い大工道具など」。江戸時代、庶民の多くはリサイクルショップを利用しました。そして、酒造りの本場として「酒家中」、「樽屋中」、「樽木商組合」、「糟屋中／酒糟」、「越木岩水車屋中／精米」、「仲仕中／酒運搬」。門前の宿場町関連では「旅籠屋中」、「置屋中」。漁業関係では「明石生魚仲買組合中」、「干鰯(ほしか)屋中／肥料」で当時盛んだった綿栽培に大量に使用されました。

西宮の近代の街の風景がおぼろげながらでもよみがえりましたでしょうか。まさにイベントテーマどおり「西宮歴史“発見”物語」になりました。

宗門帳を 解読して、データにして…

古文書班

古文書班は平成24年(2012)から始まりました。天領西宮町にあった約450冊の宗門帳を解読し、データ化することです。当該一家がいづれかの寺院に属していることとあわせて同居人、奉公人を含めた家族構成を記した人別帳でもあり家族別に戸主が捺印しています。宗旨、所在地、旦那寺、貸家主、屋号、年齢、家庭内地位、名前が記録されています。　(荒木知)

★ボールペンは使えません

分類の仕方は寺院数の多い一向宗(東西浄土真宗)、浄土宗はそれぞれ一冊づつに収められていますが、禅宗、真言宗、法華宗(日蓮宗)は一冊に纏められています。天台宗は見当たりません。また、世俗の地位により、家持(苗字所持家優先)、借地、借家と３つに分類されています。江戸時代の書類ですので、調査時は極めて慎重に取り扱い、史料は腕時計等をはずした両手で持ち、机上には不必要なものは置けず、鉛筆（ボールペンはだめ)。消しゴム、辞書、眼鏡のみ許されています。

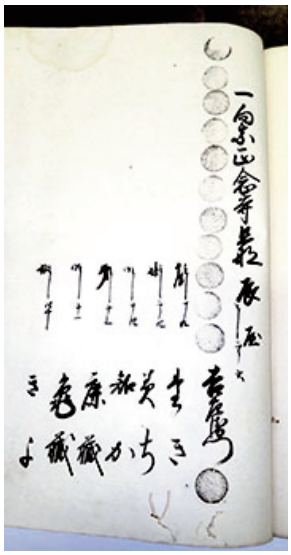
西宮村は江戸初期は尼崎藩領でしたが、中期には天領になり、町に昇格し、近隣農村から多くの職人や商人が流入しました。武家以外は苗字を所持していませんので、屋号を名乗ることにより同名を区別しました。また、女と子供は、戸主にはなれますが、押印は出来ません。然るべき代判人が必要です。

注意事項として切支丹、賭博、私娼の禁止が記されているのもあります。水帳も残っています。水帳とは今でいう名寄帳（土地・家屋課税台帳）を作る基礎書類です。

★酒屋の居候→代官→実業家

幕末、西宮正念寺から門戸村東光寺への宗旨人別送り状が残っています。それによれば濱之町一向宗正念寺檀那辰屋吉左衛門の弟鹿蔵が門戸村東光寺檀那の中嶋六左衛門方へ養子に入っています。辰屋とは酒造業の辰馬家のことで、中嶋家は尾張藩家老石河家領門戸村代官を勤めています。鹿蔵は武士らしく孝之丞成教と名乗り、若くして代官職をつとめ、維新後は辰馬本家と協力してマッチ工場や、阪神電鉄の経営に参加しています。(写真1、写真2)

（写真１）



（写真２）

★呑兵衛医者→名医→戯作者→俳諧師

浜東町の禅宗筆頭に医師の鎌田三伯が記載されています。初見は寛政４年(1794)で借家人でしたが、以降、家持として幕末の文久３年(1863)まで９冊に載っています。鎌田三伯は西宮神社の巨大灯篭の寄進者の一人として彫られています。

また、西宮神社の御社用日記の元禄14

年(1701)3月11日の項に三伯の先祖と思われる医師鎌田三仙が社殿で泥酔し大暴れした記録があります。

三伯は当時大坂で緒方洪庵と並び称された原老柳の一番弟子として、また息子の貫吾は17番に掲載されています。しかし、慶應3年(1867)のには鎌田家の記録がありません。

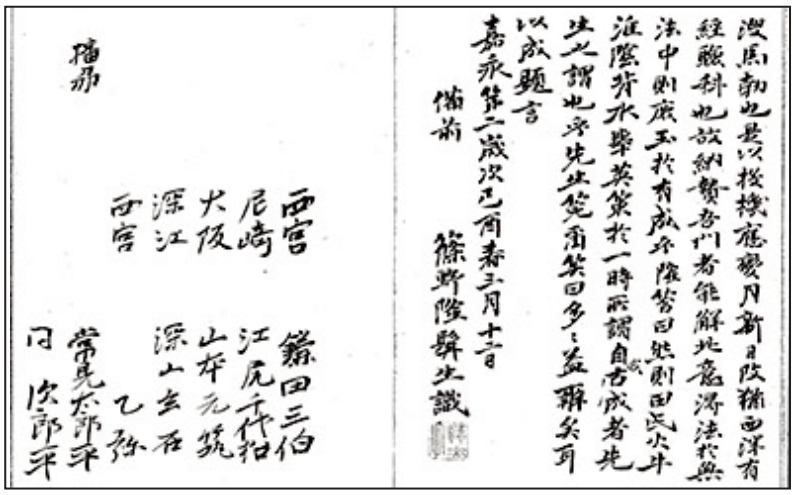
転宅？廃業？断絶？かと案じていたら、阪急池田文庫所蔵の古書から明治20年(1887)の大阪市南区西櫓町で鎌田新仙堂という出版社の出版兼編輯人として鎌田三伯が登場しています。

写真３＝山口市の常栄寺にある鎌田三伯こと俳諧師二蕉庵紫香の句碑

（写真５）

また、雪舟縁りの山口市常栄寺には元幕府漢方医鎌田三伯こと俳諧師二蕉庵紫香の句碑があります。彼は大正８年(1918)でなくなっています。一説には享年80歳。本籍は熊本県とか、本名は松平郷で家康由来のボロボロの甲冑を大切にしていたという謎めいた人物であります。(写真３、写真４，写真５、表１)

（写真４）



（表 １）　何故か気になる鎌田三伯家の年表

出典根拠		濱石材町 宗門改帳 借家編	濱東町 宗門改帳 家持編	濱東町 宗門改帳 家持編	西宮神社 灯篭 寄進者	濱東町 宗門改帳 家持編	原老柳 門譜		濱東町 宗門改帳 家持編	原老柳 古稀祝い 贈答	濱東町 宗門改帳 家持編	濱東町 宗門改帳 家持編	鎌田新仙堂 阪急池田 文庫所蔵	山口市 常栄寺 句碑
西暦		1792	1800	1834	1836	1843	1849		1851	1852	1861	1869	1887	1919
年号		寛政４	寛政１２	天保５	天保７	天保１４	嘉永２	3月12日	嘉永４	嘉永５	文久１	明治２	明治２０	大正８
干支		壬子	庚申	甲午	丙申	癸卯	己酉		辛亥	壬子	辛酉	己巳	丁亥	己未
経年			8年後	34年後	2年後	7年後	6年後		2年後	1年後	9年後	2年後	18年後	32年後
名前	地位											鎌田新仙堂		
三伯①	戸主	36歳	44歳										大阪市南区	紅葉して
冨士藏			11歳										西櫓町	落葉してああ
													二番地ノ内	朽葉かな
三伯②	戸主			42歳	寄進者	51歳	筆頭弟子	蕨翁相果					九番戸	
													鎌田三伯	
貫吾	伜			15歳		24歳	17番弟子	三伯③襲名	㉛歳		㊶歳	大阪府平民		
美和	女房										31歳	母39歳	出版兼	
三伯④												25歳	編輯人	死亡75歳
はつ	女房											女房18歳		(80歳説有)

飛んだ！ 飛んだ！ 竜吐水のパワー

竜吐水班

竜吐水とは、江戸時代中期から明治時代にかけて使われた木製の消火用手押しポンプです。それが現在も寺院や民家に保存されています。

竜吐水班は平成 27 年(2015)から発足。竜吐水の当時の活動状況や現況、資料調査などを安全遺産の観点からも調査し記録することとしました。消防団を回り、火の見櫓や半鐘、古い消防機材や装束も現地調査し記録するなどの活動もしてきました。　（衣笠周司）

★水は飛んだがビショビショに

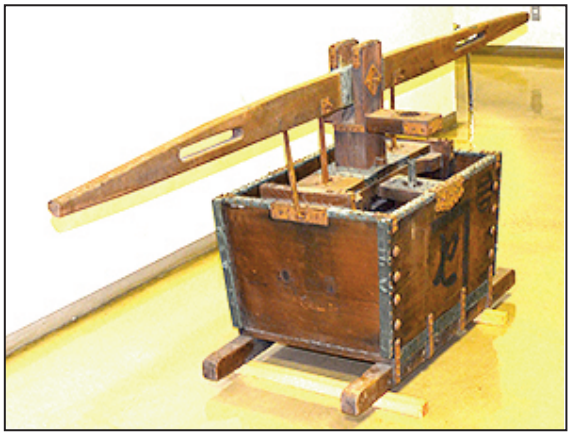
竜吐水という消火ポンプ、これでどのくらい水を飛ばせるのでしょうか。明治の頃はこれで本当に火事を消せたのでしょうか。それを確かめる機会がやってきました。

解体復元した竜吐水で放水実演があるというので、われらが竜吐水班は、京都の有形文化遺産「長谷川家」へ出かけました。

竜吐水を庭に持ち出し、水を入れて二人掛かりでギッコンバッタンと音高く漕ぎだすと筒先から水は飛び出してきました。だけど筒の接合部から四方八方に水が漏れ出して、漕ぎ手も筒を持つた人もずぶ濡れに。

それでも放水された水は 1 階の屋根を越して 2 階まで届くことが確認されました。

→京都・長谷川家で行われた竜吐水の放水実演



郷土資料館に保存されている竜吐水

★竜吐水よりも水鉄砲？

竜吐水について当時の新聞報道を見ると、1898 年に東京の魚屋が火事になったとき「竜吐水ぐらいなのでみるみる延焼」と役立たず扱い。評判はさっぱりでした。

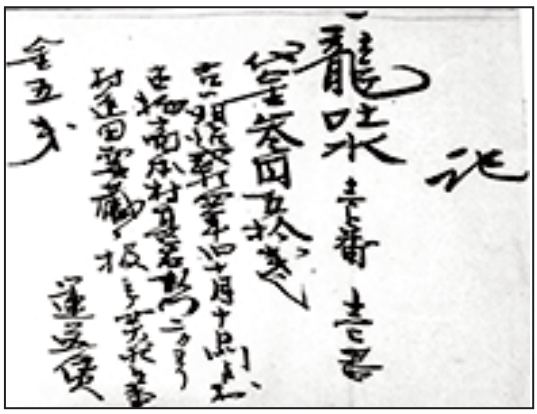
維持管理費も大変で「竜吐水より水鉄砲を並べた方がマシ」とまでいう酷評もありました。

それでも 1863 年の江戸城西の丸炎上のときは 20 台以上の竜吐水を運び込んで消火したという成果も発揮しています。

このように竜吐水は、いろいろ酷評されていたけれど、京都の放水実演に参加して「竜吐水、やるなあ」と見直した班員の感想も聞かれました。

★竜吐水を測ってみよう

西宮市内にも竜吐水が 10 台ほど保管されています。まず西宮市立郷土資料館に大



竜吐水に関する古文書も調査＝下大市村 中島家文書（館蔵）

型の竜吐水が２台あります。これについて仕組みを点検、本体や腕木の長さなどの測定を行いました。調査結果は下の例のような測定図や写真に撮って記録しています。

大型の竜吐水は、山口町の郷土資料館にも２台あり、永福寺、淨橋寺などにも保存されています。これらも現地調査をして同様に記録にとどめています。

こうした調査で困ったことは竜吐水に書き込まれている年号や製造所の文字が摩滅などで読み取りが困難なことでした。

★にわか消防団員サン

西宮市内の消防団は７地区に分かれ１本部33分団あります。各分団を順次訪れて古くからある消防機材の調査を行いました。各分団には引き継がれてきた団旗や法被、提灯などが保存されていました。

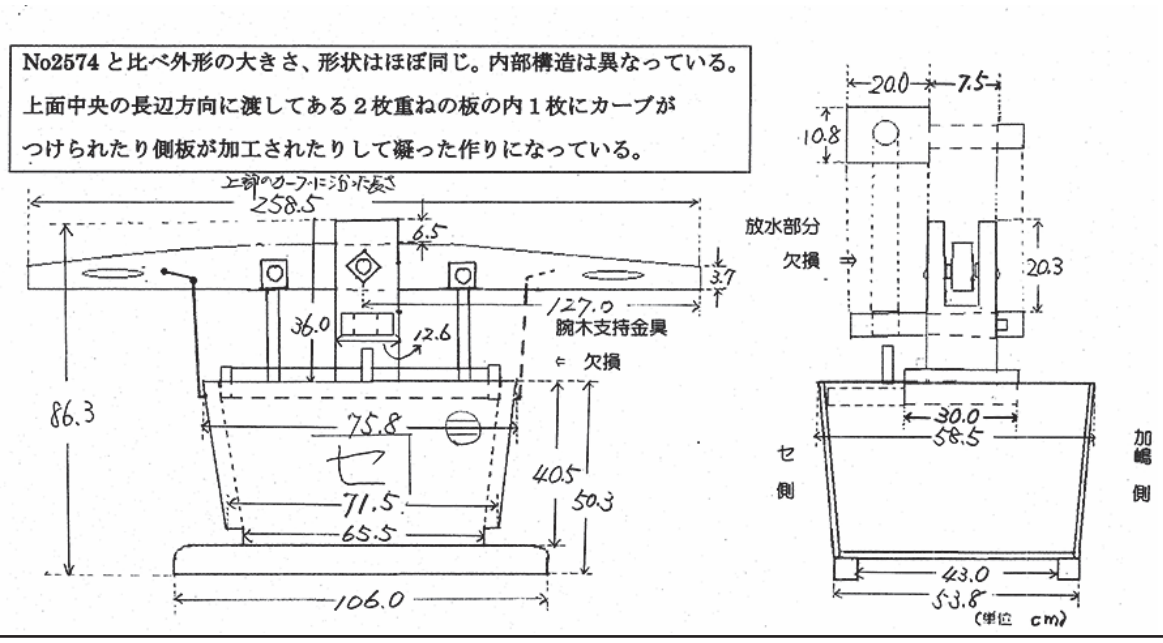
記録用に法被の写真を撮るのにモデルさんに困りました。まず女性班員がりりしく着用。その勇姿を見て男子モデルもつぎつぎ登場し、本物顔負けの装束で写真に映るまでになりました。

分団回りをしていて各分団で団員の減少が悩みの種という実情を知らされました。

年次総会の研究発表では班員が法被を着て壇上に集合し、拍手を浴びたのがいい思い出となりました。

←郷土資料館所蔵の竜吐水を調査

西宮市立郷土資料館 所蔵（No.2820）　竜吐水 寸法図　　(2016.7.9.調査)　　作図・高谷 康彦



解説会、パネル展で 市民にもアピール

活動紹介

各班それぞれの文化財調査活動の他に、勉強会や発表会などの活動にも取り組みましたので、その一部をご紹介します。（川上早苗）

★各班ごとに活動報告会★

平成18年(2006)に始まった西宮歴史調査団の活動ですが、地域の歴史に関心のある人たちが集まったとはいえ、文化財調査をしたことがあるという人はあまりいなかったのではないでしょうか。そこで毎月第二土曜日の月例会で西宮市立郷土資料館学芸員から文化財調査の様々な方法を教わり、また並行して日々の調査を続けるうちに理解し慣れてくる、というようにして調査を進めていくことになりました。

ただ、自分の所属する班については詳しくなっても、他の班がどのようなことを調べているのかよく知らないのはもったいないということで、調査活動のすすんだ4年目の平成21年(2009)には、活動報告会として各班の活動状況を発表する機会を年度末に設けました。さらに、せっかくだから調査団員だけでなく市民の方にも聞いてもらおうということになり、5年目の平成22年(2010)からは活動報告会を一般公開し、多い時には20人ほどの一般の方が聞きに来られた年もありました。

報告会で日頃の活動を紹介

暑さ寒さと楽しさと　団員の感想

◆「今年は夏の暑さ、冬の寒さが、野外調査に影響し、予定した日時に行動できなかったため、その分年度末には難儀をした。それでも調査団ハイキングや、活動報告会では調査資料が生かせて楽しい思いもできた。」

★調査団と歩く・現地解説会★

年度末の活動報告会では、スライド画像や印刷資料などを用いて調査の様子を紹介していました。ただどうも今ひとつ伝えきれないところがあったりして、ぜひ現地で現物を見ながら紹介したい話を聞きたいという意見が出て、現地解説会を開催することになりました。

初回は平成23年(2011)9月に「今津・甲子園を歩く」を開催しました。各班からの有志が集まり、まずは石造物班・橋梁班・街道班・地蔵班の調査対象物が多くあった地域として今津・甲子園を選びました。それまでの調査から、これは紹介

したいぜひ知ってほしいといったポイントをピックアップし、2時間ほどのウォークのコースを設定し、解説担当の分担などをしました。

定例会活動として調査団内での行事の予定でしたが、一般市民の方にも身近なところにある歴史を知ってもらおうと告知すると15人の参加がありました。ケーブルテレビの取材が来て後日テレビで紹介されるなど、今までにない活動の経験となりました。

平成25年(2013) 11月の「旧西宮町を歩く」では活動を開始して2年目の古文書班の内容も加わり、歩くだけでなく郷土資料館で旧西宮町の宗門帳や古地図などの史料を見てもらうといった内容も加えました。

平成28年(2016) 10月の「西宮神社を歩く」は、9月に郷土資料館の展示で西宮神社の石造物調査を取り上げた内容に合わせて行いました。この展示は調査団の活動紹介展示として企画するので、興味のある人は準備を手伝ってほしいという呼びかけがあり、調査団員有志2人が展示の手伝いに加わりました。

上＝芭蕉・鬼貫の句碑を展示の目玉に
下＝ 西宮神社を歩く、で解説中

あくまでちょっとした手伝いのつもりのようでしたが、展示に関するほぼすべての作業を体験することになりました。まずは数ある石造物の中から展示の中心となる石造物を決め、そのほかに紹介する石造物をいくつか選び、それらを追加調査し内容を深め、その内容をどのように説明するかまとめ、展示品のサイズからレイアウトを考え、展示に使う印刷物が出来たらパネルに仕立て、展示室に並べて、と4ヵ月ほどかかってなんとか開催日に間にあわせました。

この他の年には、甲東村、広田神社、浜東町も歩き、合計6回開催しました。

拓本とったりパネル作ったり 団員の感想

◆「9月の特集展示『西宮神社の石造物』への参加は、展示の裏側にある準備作業の

一端を垣間見たようで本当に楽しかったです。準備調査は発見の連続でしたし、展示用の拓本を採ったりパネルを作成する作業は、展覧会に対する自分の見方を変えました。展示開始直前の資料作成などは、やや火事場の馬鹿力的でしたが、それも良い経験。また機会があれば是非参加したいです。」

中央図書館での展示

◆「旧浜東町ウォーキング行事に当たり、説明ポイントである信行寺への事前の聞き取り調査に参加しました。初めての事でしたので、うかがったお話を正確に記録、史料を撮影、そしてそれらを調査報告としてまとめる等、それぞれ簡単なことではなく、貴重な体験をさせていただきました。」

★図書館との連携・パネル展★

年度末の活動報告会の時には発表だけでなく、班の活動や報告内容を簡単に紹介するポスターも作っていました。当初は報告会当日に会場内に掲示するだけでしたが、郷土資料館前の壁面に報告会開催の告知もかねて、調査団活動全体を紹介するパネルを展示するようになりました。そしてせっかくなのでこのパネルを使ってもっと広報活動をしたほうがよいのではないかという意見が出て、図書館の場所を借りてパネル展「郷土史を学ぶ」を平成26年(2014)10月に西宮市立中央図書館、翌年2月に鳴尾図書館、3月に北部図書館で開催しました。

鳴尾図書館での展示

ただ報告会で使用したパネルの再利用ではなく、パネル展示を一から企画しなおすことになり、集まった5人の調査団員有志が学芸員から企画を立てる時の考え方や注意点、パネル作成の方法などを教わりながら作業を進めていきました。展示の基本となる内容は各班の活動の様子や調査成果をまんべんなく紹介することです。しかし鳴尾図書館では会場が広かったため、地域の人により関心を持ってもらえるよう、街道班・石造物班・地蔵班の調査の中から鳴尾地域に関するものを追加して取り上げ、パネルの枚数を増やす工夫をしました。

★図書館との連携・講座や展示★

北口図書館ではこの図書館巡回パネル展は開催しませんでしたが、郷土史を調べるのには図書館の資料も活用するなど関連のある事から、何度か展示を行いました。平成27年(2015)3月には「歴史・訪ね・歩き@にしきた～西宮歴史調査団の成果～」がありました。これは定例の年度末の報告会の出張簡易版のようなもので、石造物班・橋梁班・古文書班がより分かりやすい内容で、さらに多くの人に活動を知ってもらえるようにと発表しました。北口図書館という場所が人が集まりやすいからか、40人近い一般の方に話を聞いていただくことが出来ました。

北口図書館での展示

また平成28年(2016)12月の北口図書館ブックフェア「西宮歴史”発見”物語」では、それまでの調査の中から興味を持ってもらえそうな内容をパネルにして紹介したり、古文書班はそのパネルの内容に関する宗門帳の現物をケースに展示しました。この期間中には「市民が語る西宮いま昔物語@にしきた」という講座の講師も調査団員が担当しました。

さらに平成31年(2019)2月の北口図書館ブックフェア「岡本宇兵衛の大庄屋ライフ」では、一日だけでしたが古文書班によるワークショップ「くずし字にふれる～身近な変体かな～」を開催しました。身の回りにある商品名や商店名などに残る変体かなをパズル形式で読んだり、変体かなの見本から選んだ字を自分で書き込んでしおりを作ったり、古文書やくずし字を身近に感じてもらえたらいいなという内容を考えました。

ワークショップの面白さ 団員の感想

◆「北口図書館でのワークショップでの来場者(お客様)とのやり取りは、日頃の活動と違う面白さを感じさせた。」

くずし字ワークショップを開催

★さくら FM に出演★

調査団活動の PR でさくら FM のラジオに出演しました。平成 29 年(2017)7 月「西宮徹底解剖」と令和元年(2019)6 月 7 月「歴史と文化の散歩道」です。

「西宮徹底解剖」では、古文書班・石造物班・橋梁班・竜吐水班の班員の代表が担当学芸員と一緒にさくら FM のスタジオに出向き、活動内容の紹介や面白かったこと苦労したことなどの感想などを話しました。「歴史と文化の散歩道」では、パーソナリティーの前田氏が郷土資料館で調査活動中の様子を見学に来てのインタビューとなった班もあります。

さくら FM のスタジオで収録

★西宮歴史調査団ニュース★

調査団活動の目的は「文化財の現状を調べて記録に残す」ことなので、たとえば地蔵や橋などの対象物の所在地やサイズや傷み具合などを確認して、調査台帳に記録していけば十分役目を果たしています。ただ団員の中には、基本の調査の中で気になったことに関して独自に調べ物を進める通称「自由研究」に取り組む人も出てきました。そしてそれを年度末の活動報告会だけでなく、定例会にも機会を作って発表することも増えてきました。

そこで、このように何らかの発表用にある程度まとめられた内容をより多くの人に目にしてもらえるようにと「西宮歴史調査団ニュース」という小冊子を平成 26 年(2014)3 月から発行を始め、不定期発行ですが最新号は 14 号となっています。

★西宮歴史調査団通信★

調査に必要な技術や知識を勉強したり、班ごとの調査だけでは顔を合わすことのない調査団員間の交流を深めたりするため、毎月第二土曜日に郷土資料館に集まって定例会がありました。その時に連絡事項やちょっとした話題の紹介などを記載した「西宮歴史調査団通信」を学芸員が作成し配布していましたが、平成 24 年度(2012)より調査団員が編集することになりました。

掲載する内容はその都度調査団員の誰かに割り当てられ、ネタがないと悩みながらも、担当する調査の様子を報告したり、調査には直接関係はないけれど気になる文化財があると紹介したり、それらの記事からは調査団員の知られざる一面が垣間見えたりもして興味深く読みました。

紙面をレイアウトするのは編集スキルを持つ調査団員一人にすっかりお任せしてしまい、毎月大変な仕事を担当していただき助かりました。

(団員の感想は活動当時の年報より一部抜粋)

西宮歴史調査団通信 2015年4月号

発行 西宮歴史調査団 西宮市立郷土資料館内＝662-0944 西宮市川添町15-26 ☎0798-33-1298. FAX 0798-33-1799

西宮歴史調査団 10年目に突入！

活動報告会も終わり、平成26年度も無事に一年の活動を終えることが出来ました。そして、今日からいよいよ平成27年度の活動が始まります。平成27年度は新たに「竜吐水班」も加わり、4班での活動となります。

平成18年（2006年）に発足して以来、ついに10年目に突入です！

「市民が主体となって、指定文化財には指定されていないが、市内に残る貴重な歴史資料を悉皆調査し、後世に残していこう!!」と発足して9年。長かったようで、あっという間だった気がします。

しかし、この9年間で、西宮歴史調査団・調査報告書第1集『甲山八十八ヶ所』と第2集『西宮の地蔵』を刊行し、現地見学会やパネル展示、活動報告会、北口図書館での講座など様々な行事を開催しました。また、通信や西宮歴史調査団ニュース1号、2号なども発行しました。

昨年度の初めにも書きましたが、文化財を守り、活かし、伝えていくには資料館員の力だけでは小さく、市民一人一人の力がとても重要なのです。そのため、他の博物館からも西宮歴史調査団の活動は大きく注目されており、今後の活動への期待も高まっています。

今年も地道な作業が続きますが「未知の文化財が未調査のままで失われるということがないように頑張ろう!!」を合い言葉に、10年目も一緒に調査してくださると嬉しいです。

そして、今年度か来年度には「10年目を記念して何かできたら…」と考えていますので、皆様のご意見・ご協力をお待ちしています。

（文責・細木ひとみ）

橋梁班 高橋さんの発表

古文書班 藤田さんの発表

石造物班 荒木さんの発表

編集・衣笠雨司（古文書班）

「西宮歴史調査団通信」の各号は西宮市立郷土資料館のホームページで見ることができます。

研修で 知識も スキルも 高めて

俵谷和子

西宮歴史調査団は、郷土史学習会（石造物、古文書、民俗、文化遺産の講座）を経て事業を開始したこともあり、ボランティア養成講座等は設けず、実際の調査の中で調査方法等を学び実践するスタイルで活動を続けてきました。

←郷土史学習会

そのため、毎月第２土曜に設けた月例会では、調査に必要な知識やスキルを高めるため、さまざまな研修を行ってきました。ここでは、当館が調査団活動のなかで取り組んだ研修について報告します。なお研修の全貌は、本冊子の 29 頁から記載する月例会実施状況をご参照ください。

→企画展示解説（指定文化財公開「西宮の社寺建築」）

（１）展示解説

常設展示：西宮の歴史と文化財の通史を紹介する常設展示の解説を、時代や分野をごとに解説を行いました（7 回）

企画展示：特別展示をはじめ企画展示の開催中に、担当学芸員から展示の見どころを紹介しました（18 回）。

（２）西宮の歴史・文化財等に係る講座

学芸員が自身の専門分野の講座を行い、史資料などの実物資料をケース越しではなく目の前で、時には実際に触れながら質感、サイズ、重量などを体験いただきました。(29 回)。結成初期は、合田茂伸氏（課長補佐）による考古学関連講座を複数回実施しました。

また、登録博物館への登録の際の研修（平成 25 年 2 月 18 日）や、開館以来学芸員・館長（文化財課長）として当館や本市の文化財行政を牽引してきた西川卓志氏の講演。文化庁長官に認定された「西宮市文化財保存活用地域計画」（令和 3 年 12 月 17 日に）の解説など、法令の改正に際しての当館（当課）の指針などの講義も行ってきました。

（３）取り扱い研修

調査に必要な技術力の向上のため、写真撮影、古文書、民俗資料、考古資料などの取扱い研修や文字を判読するための拓本（湿拓）などの研修を行いました（32 回）。第 1 回目のカメラ研修では、フィルムカメラを用いて互いに上半身ポートレート写真を撮影しました。

→文化財現地見学会（酒ミュージアム）

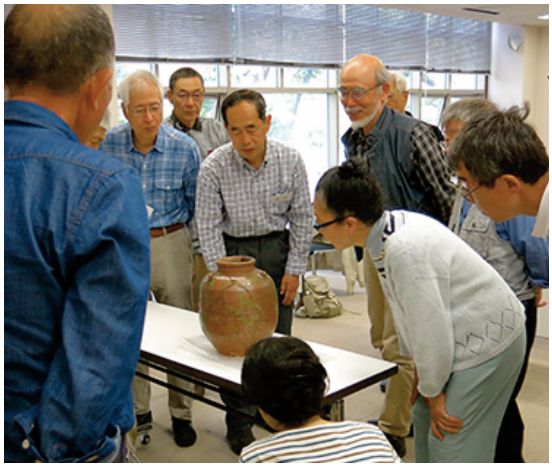
（４）文化財見学会

市内の文化財の見学会も積極的に開催しまし

た。建造物・美術工芸品や史跡など現地に訪れ、実物の文化財を体感していただきました。

（5）学芸員講座「文化財のツボ・タネ・華」

複数分野の学芸員が所蔵する当館の強みをいかし、一つの資料を分野ごとに見方や評価、また情報共有することで新たな発見



→文化財調査のツボ（信楽焼壷）

があることを研修から学んでいただきました。信楽焼の壺に始まり、紙・石・弓矢・井戸など考古、民俗、近世史からの様々な視点で研修を行いました（12 回）。

研修終了後は、担当した学芸員同士が研修報告書を作成し、狙い通りの研修結果であったか、調査団の方の反応はどうであったか、などの振り返りを行い、次回への課題等を含めて共有していました。研修の配付資料、研修結果の内容を公開することまで

↑文化財調査のタネ（槌・杵）

↓文化財調査の華（石室ワークショップ）

決まっていましたが、実施には至りませんでした。

★資料真ん中に語り合い　清水洋子

研修では、郷土資料館所蔵の考古・歴史・民俗など広範囲な資料をつかい、文化財調査の考え方や方法を学びました。

「石」や「紙」など、ひとつの題材で学芸員の皆さんがリレー形式の講義をした年もありました。同じテーマでも専門分野によって異なる観点のアプローチがとても面白かったです。

資料の撮影技術や、現物を手に取り調査票を作成する実習もありました。自分の描いた下手なスケッチに頭を抱えたりしつつ、資料の取り扱い方をはじめ多くの情報を取り出すには、注意深い観察が最も大切だと手を動かして学びました。

ほかにも書きたい研修は山ほどありますが、すべてに共通して記憶に残っているのは、資料を真ん中にして学芸員・団員の皆さんでわいわいと語り合った時間です。各々の調査活動の経験から出る会話で満ちていました。

わがまちの文化財とより近くで触れあい、仲間と語り合いながら考え、理解を深めていく、本当に豊かで有意義な学びの場でした。　（古文書班　2014~2022 年所属）

★一番印象に残っていること　早栗佐知子

調査団で印象的だったことは無数にありますが、強いて一番をあげるなら橋梁班を引き継いだ2007年度初めに班員の方々と新堀川沿いを自転車で走った時のことでしょうか。まだ西宮市のことをよく知らなかったこともあって、調査カードや文献などからの情報と現地で確認できた橋梁周辺の事象が繋がっていく楽しさは、なんとも言えないものでした。

それまで民俗調査で実感してきた「現地で見て感じることが一番」を再認識したのです。それが層になってできたのが、既刊の4冊の報告書ではないでしょうか。

★素晴らしいチームワーク　椿原佳恵

私は2016年10月から西宮市立郷土資料館で勤務しており、新人1年目から西宮歴史調査団の竜吐水班の皆さんとともに、竜吐水を中心とした市内の消防用具を調査するために、さまざまな場所を訪れたことが思い出に残っています。

竜吐水班の班員の方々のチームワークはとても素晴らしく、どの調査場所を訪れても調査時は実測や写真撮影等、自主的に役割分担をされており、毎回滞りなく調査されている姿を目の前で拝見し、写真等で記録させていただきました。皆さんと一緒に調査に携わることができたことは、学芸員として多くの経験を積むことに繋がりました。深く感謝申し上げます。

また、竜吐水班の7年間の調査成果をもとにまとめられました報告書『西宮の竜吐水―伝統的消防用具調査報告書―』の刊行に携わることができ大変嬉しく思います。

調査団はファイナルということですが、これからも調査団の皆さんとの交流は持ち続けたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

★西宮歴史調査団の思い出　猪岡叶英

私は、2017年から7年間、調査団の活動をサポートさせていただきました。豊かな人生経験を積まれてきた方が多く、得意なことを活かした活動をされているなという印象でした。例えば、写真を撮ることが好きな方は文化財を撮影する役割を担い、お話をすることが好きな方は報告会で調査成果を発信してくださいました。まち歩きを得意とする方は自らの足を使って地道な調査に努めていただきました。

また、調査対象とした文化財は、地域の人々の手で守られてきたものが多く、地域の方々の協力が無ければ成り立たなかったと思います。西宮歴史調査団は活動を終えますが、西宮の歴史と文化財を語る上で欠かせない存在となったといえるでしょう。

みんなで調べた

★コロナで窮屈な思い　藤原亮太

私が調査団の石造物班の担当をしていた頃は、入庁後すぐで右も左もわからないタイミングで、手探り状態のコロナウイルスの対応もしなければならない状況で活動していました。

集まって何かをするというのが中々難しいご時世で、自宅での調査カードの確認作業をお願いするなどエネルギッシュな皆様には窮屈な思いをさせたかと思います。

調査内容に関しては「悉皆調査」を実施しているはずだが、各々で測定箇所が違うなどのバラつきが散見されましたので、班内で調査の統一を図るためにどうすれば良いか試行錯誤の日々でした。

長きにわたり皆様が活動されていた調査団の集大成ということで、成果を楽しみにしています。

★まだまだ若年だったが…　森下真企

私が調査団を担当した当時は、調査活動とは別にパネル展示やハイキングの企画等も調査団で行っており、定例会でそのための研修等がありました。当時を振り返ると、定例会後にはいつも衣笠さんと調査団通信の打合せを行っていたこと、その後、事務所でほかの学芸員と情報共有や調査団のあり方等を議論していたことを覚えています。

私自身が当時はまだ若年であったこともあり、調査団通信をバージョンアップさせたい、と厚かましくも衣笠さんに編集をお願いし、他の学芸員とは、調査団は「調査」ボランティアなので、展示やハイキングではなく、調査の質をあげるための研修や調査活動にも学芸員が同行することが重要なのではないかと、生意気にも先輩に意見することもあったと、懐かしく感じています。今年度がファイナル年度ということですが、令和６年度からは担当学芸員も新たにより幅広い活動を行う「にしはくサポーターズ」がスタートしています。調査に限らず様々な博物館の活動を通して、学芸員と一緒に楽しみながら西宮の歴史を調べるということは、歴史調査団に通じるものです。是非とも調査団の方々にもサポーターズに参加いただき、引き続きの活躍をお願いしたいと思います。

末尾になりましたが、地域史研究者としての調査団員の活動や実績に対して、一人の学芸員として敬意を表するとともに、調査活動に加えて、調査報告書の刊行や成果パネル展、ラジオ出演等、多岐にわたり活躍している西宮調査団の方々に深く感謝いたします。

元調査担当の思い出

あの日、あのとき

★キラキラしていたまなざし　西尾嘉美

調査団の活動を締めくくるとのこと、みなさま、お疲れ様でした。

西宮では９年という短い時間でしたが、濃厚なお付き合いをさせていただきました。

なかでも、印象に残っているのは、竜吐水班の調査です。

現地に到着して竜吐水を目にしたとたん、みなさんスイッチが入って、なにも事前打ち合わせもしていないのに、それぞれの武器（ノート・筆記具・カメラ・メジャー）を持ち、一斉に動き始めたのです。見事な連係プレーでした。

そして、楽しそうで、キラキラしたまなざしが素敵でした。

学芸員の仕事は卒業しましたが、みなさんの「キラキラ」を見習って、いろんなことにチャレンジしようと思います。

★18 年間の活動を振り返って　衛藤彩子

調査団発足時には、18 年間も共に歩んでいくことは想像できませんでした。私が担当したのは、街道班５年間、石造物班１年間。そして古文書班は 13 年目を迎えました。市民ボランティアとして地道に長く調査を続ける姿には頭が下がります。ファイナルを迎えるにあたり、様々なことが思い出され感慨深いです。

初めて文化財の調査をするという方々が、写真の撮り方（最初はフィルム写真でした）などの研修を受けながら経験を積み重ね、さらに興味を持ったテーマで研究するため国内を飛び回り、とうとう市民講座で講師を務めるまでに成長されました。市民自らが歴史を記録し、語りつぐという理想的な形を実現されたと思います

調査団での調査成果は、展示や講座等で私も大いに活用しています。市民からの問合せに、調査記録を調べることもあります。表立って調査団の名が出なくとも、調査カードに記録された一つ一つが、郷土資料館のあちらこちらで大活躍しているのです。

西宮歴史調査団活動のあゆみ

（１）刊行物

ア　調査団通信

平成 21 年２月から令和２年３月まで毎月発行し、月例会で配布。事務室前掲示板に掲示するとともに市ホームページに公開。平成 24 年５月からは、調査員が編集を担当。

イ　調査団ニュース

平成 26 年３月 31 日に発刊。不定期で第 14 号まで発刊。
第１号 (平成 26 年（2014）３月 31 日発行)
宇野信子･佐藤敬子「新堀川はし物語―橋梁調査班・新 堀川チームの調査から―」
第２号（平成 26 年（2014）10 月３日発行）
髙谷康彦「西宮町宗門帳をもとにした人口などの集計の試み」
川上早苗「西宮町宗門帳に記載された旦那寺について」
第３号（平成 27 年（2015）７月 30 日刊行）
倉田克彦「太多田川の橋と伝承(上)」
第４号（平成 27 年（2015）７月 30 日刊行）
衣笠周司「「駅前橋」は残った―山口町を流れる西川の調査から―」
倉田克彦「太多田川の橋と伝承(下)」
第５号（平成 29 年（2017）３月 23 日刊行）
衣笠周司・髙谷康彦・中田 昇「赤くてかわいい竜吐水 (竜吐水班中間報告)」
第６号（平成 29 年（2017）８月 12 日刊行）
清水洋子「宗門帳に見る幕末の濱東町二丁目」
第７号（平成 30 年（2018）３月 10 日刊行）
粟野光一「歴史遺産保存活用フォーラム in 尼崎 参加報告」
荒木 知「何故か気になる鎌田三伯―旧西宮町宗門帳の調査から―」
第８号（平成 30 年（2018）４月 14 日刊行）
衣笠周司「竜吐水、精いっぱい働いた！」
第９号（平成 31 年（2019）３月９日刊行）
川上早苗「竜吐水製作所について」
第 10 号（令和元年（2019）８月 10 日刊行）
野川至「国道２号橋梁調査のエピソード」
小西貞一郎「夙川には「夙川橋」が４つある」
第 11 号（令和元年（2019）９月 14 日刊行）
清水洋子「濱東町宗門帳の印鑑について」
第 12 号（令和２年（2020）10 月８日刊行）
戸次節子「信行寺―法灯を守り続けて 630 年―」
第 13 号（令和３年（2021）８月 20 日刊行）
衣笠周司「竜吐水と火災報道」
衣笠周司「里帰りした竜吐水」
第 14 号（令和３年（2021）12 月 17 日刊行）
粟野光一「名塩八幡神社で見た石碑と盃状穴」
牛田孝次「名塩八幡神社の石造物調査にみる名字と生業」

ウ　年報

平成 19 年度から年度ごとの活動をまとめて令和元年度まで刊行した。

エ　調査報告書

「甲山八十八ヶ所」平成 24 年３月刊行・平成 26 年増刷（寺院・墓地班）
「西宮の地蔵」平成 25 年３月刊行（地蔵班）
「西宮の橋梁」令和３年３月刊行（橋梁班）
「西宮の竜吐水」令和５年３月刊行（竜吐水班）

オ　NewsLetter

（ア） 調査団 NewsLetter
感染症対策で月例会が開催できず、調査団通信の代替としてメールで配信（令和３年６月～現在)。
（イ） 調査団 MonthlyLetter
令和３年度に各月メールで配信（12 回)。

（２）展覧会

ア　パネル展示（調査団主体）

（ア） 市立図書館と共催で「郷土史を学ぶ」をテーマに展示とブックフェアを行なった。
・中央図書館エントランス 平成 26 年 10 月３日～11 月５日調査団の活動と図書リスト
・鳴尾図書館視聴覚室 平成 27 年２月６日～3 月１日 鳴尾地区の調査成果と図書リスト
・北部図書館閲覧室 平成 27 年３月６日～3 月 22 日 北部地域の調査成果と図書リスト
・北口図書館閲覧室 平成 28 年 12 月２日～平成 29 年１月 15 日 西宮歴史”発見”物語をテーマに開催
（イ）パネル展示（調査団関連）郷土資料館事務室前 令和３年３月 13 日～３月 28 日
「西宮歴史調査団の活動 2020」 郷土資料館事務室前 令和３年４月 10 日～５月 30 日
「西宮歴史調査団 15 年のあゆみ」

イ　特集展示

第 34 回 巡礼と石仏―甲山八十八ヶ所― 平成 23 年９月６日～10 月 30 日
第 44 回 西宮地域の宗旨人別帳 平成 26 年２月３日～3 月 22 日
第 46 回 西宮神社の石造物―春詠む芭蕉、秋の鬼貫― 平成 28 年９月３日～10 月２日
第 56 回 西宮の消防用具 令和７年１月９日～3 月 30 日（予定）

ウ　スポット展示

西宮の竜吐水―ポンプ式消火用具と安全遺産― 令和５年９月２日～10 月１日

（３）講座・普及事業

ア　現地解説会

西宮歴史調査団と歩く今津・甲子園 平成 23 年９月 10 日
西宮歴史調査団と歩く甲東村 平成 24 年 11 月 10 日
西宮歴史調査団と歩く旧西宮町 平成 25 年 11 月９日
西宮歴史調査団と歩く西宮神社 平成 28 年 10 月８日

イ　市民が語るにしのみやのいまむかし@にしきた

平安貴族の旅日記（曲江三郎）平成 25 年 11 月 22 日
西宮神社の石灯籠（衣笠周司）平成 26 年 11 月 14 日
北摂一の軍師田近新次郎（荒木知）平成 28 年 12 月 22 日

ウ　歴史・訪ね・歩き@にしきた

橋梁・石造物・古文書班 平成 27 年３月 26 日

エ　活動報告会

平成 21 年から年度ごとの活動を報告。平成 22 年度からは一般参加者を募集して３月例会に実施している。令和２年度

に感染症対策として中止してから開催していない。

（4）その他

ア　月例会

毎月第２土曜日に、展示解説、研修、特別見学会等を開催した。３月は活動報告会として、年度の活動成果を報告した。令和２年度以降感染症対策で休止。

イ　交流会

感染症対策により調査活動の制限を受けたことから、活動報告会の代替えとして実施した。

令和４年度（令和４年４月）

令和５年度（令和６年３月活動報告・西宮文化財検定）

★月例会実施状況★

平成 18 年度（2006）月例会

4 月 甲山神呪寺で石造物調査の実習（4/22）
5 月 写真撮影の実習（5/13）
6 月 各グループの調査状況報告会（6/10）
7 月 常設展示室（自然）解説（7/8）
8 月 常設展示室（考古）解説（8/12）
9 月 常設展示室（考古）解説（9/9）
10 月 高畑町遺跡の講座（10/14）
11 月 各グループの調査状況報告会（11/11）
12 月 年報作成について討論会（12/9）
1 月 年報作成について討論会（1/13）
2 月 年報作成について討論会（2/10）
3 月 年報作成について討論会（3/10）

平成 19 年度（2007）月例会

4 月 調査団の活動について（4/14）
5 月 年報作成について説明（5/12）
6 月 19 年度登録会・活動報告（6/9）（6/23 臨時）
7 月 （台風で中止）
8 月 西宮市指定文化財の講座（8/11）
9 月 西宮の歴史（西宮のおいたち）（9/8）
10 月 旧石器時代から縄文時代の講座（10/13）
11 月 弥生時代の講座（11/17）
12 月 阪神間の弥生時代の講座（12/15）
1 月 古墳時代の講座（1/12）
2 月 「魏志倭人伝」について講義（2/9）
3 月 古墳時代の講座（3/8）

平成 20 年度（2008）月例会

4 月 年報刊行の反省会（4/12）
5 月 20 年度登録会（5/10）
6 月 20 年度の活動内容について（6/14）
7 月 特別展示の解説（7/19）
8 月 古墳時代の講座（8/9）
9 月 常設展示室・アラカルト展示解説（9/13）
10 月 常設展示室（古代・中世）解説（10/11）
11 月 アラカルト展示解説（11/18）
12 月 アラカルト展示解説（12/13）
1 月 常設展示室・アラカルト展示解説（1/10）
2 月 アラカルト展示解説（2/14）
3 月 常設展示室（近世）解説（3/14）

平成 21 年度（2009）月例会

5 月 21 年度の登録会・活動の説明（5/9）
6 月 西宮の歴史と文化財の講座（6/13）
7 月 特別展示の解説（7/18）
8 月 西宮の年中行事の講座（8/8）
9 月 西宮神社とえべっさんの講座（9/12）
10 月 越水山遺跡の講座（10/10）
11 月 指定文化財公開・アラカルト展示解説（11/7）
12 月 特集展示・アラカルト展示解説（12/12）
1 月 活動報告会（橋梁・地蔵）（1/9）
2 月 活動報告会（石造物・地蔵）（2/13）
3 月 活動報告会（街道）（3/13）

平成 22 年度（2010）月例会

4 月 自己紹介（4/10）
5 月 収蔵庫見学会（5/8）
6 月 調査団の活動目的・調査法の講義（6/12）
7 月 徳川大坂城東六甲採石場見学会（7/10）
8 月 西宮砲台の講座（8/7）
9 月 拓本実習（住吉神社）（9/11）
10 月 特集展示解説（10/9）
11 月 指定文化財公開展解説（11/13）
12 月 慶長十年摂津国絵図の鑑賞会（12/11）
1 月 アラカルト展示解説（1/8）
2 月 特別展示解説（2/12）
3 月 活動報告会・登録会（3/12）

平成 23 年度（2011）月例会

4 月 23 年度の活動内容 （4/9）
5 月 調査方法の講座（5/14）
6 月 写真撮影の実習（6/11）
7 月 西宮の歴史（原始・古代）の講座（7/9）
8 月 特別展示解説（8/6）
9 月 現地解説会（今津・甲子園）（9/10）
10 月 西宮の歴史（中世）の講座(10/8)
11 月 拓本実習（須佐之男神社）（11/12）
12 月 西宮の歴史（近世）の講座（12/10）
1 月 西宮の歴史（近代）の講座（1/14）
2 月 西宮の歴史（現代）の講座（2/11）
3 月 活動報告会（3/10）

平成 24 年度（2012）月例会

4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/14）
5 月 オリエンテーション（5/12）
6 月 文化財の見学（老松古墳）（6/9）
7 月 調査員ミニ報告会①各班活動報告（7/14）
8 月 特別展示解説（8/11）
9 月 調査員ミニ報告会②各班活動報告（9/18）
10 月 文化財の見学（名塩八幡神社祭礼）（10/13）
11 月 現地解説会（甲東村）（11/10）
12 月 調査員ミニ報告会③西宮砲台（12/８）
1 月 文化財の見学（西宮砲台）（1/12）

2 月 報告会準備（2/9）
3 月 活動報告会・登録会（3/9）

平成 25 年度（2013）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/13）
5 月 オリエンテーション（5/11）
6 月 登録博物館について・収蔵庫見学（6/8）
7 月 文化財の見学（昌林寺）（7/13）
8 月 特別展示解説（8/10）
9 月 調査員ミニ報告会①戦跡と文化財（9/14）
10 月 文化財の見学（旧山本家住宅）（10/12）
11 月 現地解説会（旧西宮町）（11/9）
12 月 調査員ミニ報告会②鳴尾の義民（12/14）
1 月 調査員ミニ報告会③武庫川に架かる橋（1/11）
2 月 報告会準備（2/8）
3 月 活動報告会・登録会（3/8）

平成 26 年度（2014）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/12）
5 月 研修 文化財とは・石造物調査の基礎（5/10）
6 月 研修 調査写真の撮影方法・古文書調査の基礎 （6/14）
7 月 調査写真撮影（実習）・橋梁調査の基礎（7/12）
8 月 （台風で中止）（8/9）
9 月 橋梁班調査報告（9/13）
10 月 石造物班調査報告（10/11）
11 月 文化財の見学（青石古墳・ヨタノ谷古墳群）（11/8）
12 月 古文書班調査報告（12/13）
1 月 特集陳列解説（1/10）
2 月 報告会準備（2/14）
3 月 活動報告会・登録会（3/14）

平成 27 年度（2015）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/11）
5 月 文化財の見学（神原周辺）（5/9）
6 月 研修 竜吐水の調査について（6/13）
7 月 研修 古文書の調査について（7/11）
8 月 特別展示解説（8/8）
9 月 研修 橋梁の調査について（9/12）
10 月 研修 石造物の調査について（10/10）
11 月 指定文化財公開展解説（11/14）
12 月 研修 報告書用写真の撮影方法（12/12）
1 月 調査員報告 北摂一の軍師（1/9）
2 月 特集展示解説（2/13）
3 月 活動報告会・登録会（3/12）

平成 28 年度（2016）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/9）
5 月 研修 文化財調査のツボ「ツボ」（5/14）
6 月 研修 文化財調査のツボ「紙」（6/11）
7 月 特集展示準備の進捗報告（7/9）
8 月 特別展示解説（8/13）
9 月 特集展示解説（9/10）
10 月 現地解説会（西宮神社）（10/8）
11 月 指定文化財公開展解説（11/12）
12 月 文化財の見学（高塚 1 号墳）（12/10）
1 月 研修 文化財調査のツボ「テレビ」（1/14）
2 月 研修 文化財調査のツボ「石」（2/11）
3 月 活動報告会・登録会（3/11）

平成 29 年度（2017）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/8）
5 月 文化財の見学（名塩産藩札文書と名塩の私札）(5/13)
6 月 研修 文化財調査のタネ「無形文化財調査」(6/10)
7 月 研修 文化財調査のタネ「民俗資料・考古資料」 (7/8)
8 月 特別展示解説（8/12）
9 月 研修 文化財調査のタネ「弓矢」(9/9)
10 月 研修 文化財調査のタネ「井戸」(10/14)
11 月 指定文化財公開展解説（11/11）
12 月 橋梁班 平成 29 年度調査中間報告(12/9)
1 月 研修 文化財調査のタネ「引札」(1/13)
2 月 研修「博物館”郷土資料館”のこれまでと、これ から」(2/10)
3 月 活動報告会・登録会（3/10）

平成 30 年度（2018）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）（4/14）
5 月 研修「慶長十年摂津国絵図」熟覧（5/12）
6 月 研修「大量埋蔵銭について」（6/9）
7 月 文化財の見学「辰馬考古資料館蔵 銅鐸」(7/14)
8 月 特別展示解説（8/11）
9 月 研修 文化財調査の華「資料研究・教育普及」(9/8)
10 月 文化財の見学「具足塚古墳」石造物班現地解説 （廣田神社）(10/13)
11 月 竜吐水班報告「竜吐水の製作所について」(11/10)
12 月 特集展示解説（12/8）
1 月 研修 文化財調査の華「展示計画・展示用具」(1/12)
2 月 研修 文化財調査の華「ワークショップ」(2/9)
3 月 活動報告会・登録会（3/9）

平成 31 年度（2019）月例会
4 月 自己紹介（団長・連絡員選出）館長講座「郊外住宅地と文教都市のまちづくり」（4/13）
5 月 文化財の見学「灘酒造用具、白鹿記念酒造博物館 蔵酒造関係文書」(5/11)
6 月 特集展示解説(6/8)
7 月 紙すき実習・活動報告「名塩地域」（7/13）
8 月 特別展示解説(8/10)
9 月 研修「考古資料・民具の実測」(9/14)
10 月 （台風で中止）(10/12)
11 月 指定文化財公開・特集展示解説(11/9)
12 月 古文書班現地解説（宗旨人別帳「浜東町」） (12/14)
1 月 研修 「災害復旧と文化財」・パネル展示解説(1/11)
2 月 館長講座「西宮市 文化財の 25 年」(2/8)
3 月（感染症対策のため中止）

令和 2 年度（2020）月例会
4 月・5 月・7 月、9 月～3 月（感染症対策のため中止）
6 月 令和 2 年度登録会(6/27)
8 月 古文書班活動報告(8/8) 竜吐水班活動報告(8/20)

令和３年度（2021）月例会
感染症対策のため月例会は中止し、メールマガジンの配信（12 回）と交流会を２回実施した。
11 月 交流会（近況報告・指定文化財公開展示解説）（11/6）
3 月 交流会（近況報告・研修「西宮市文化財保存活 用地域計画」）(3/12)

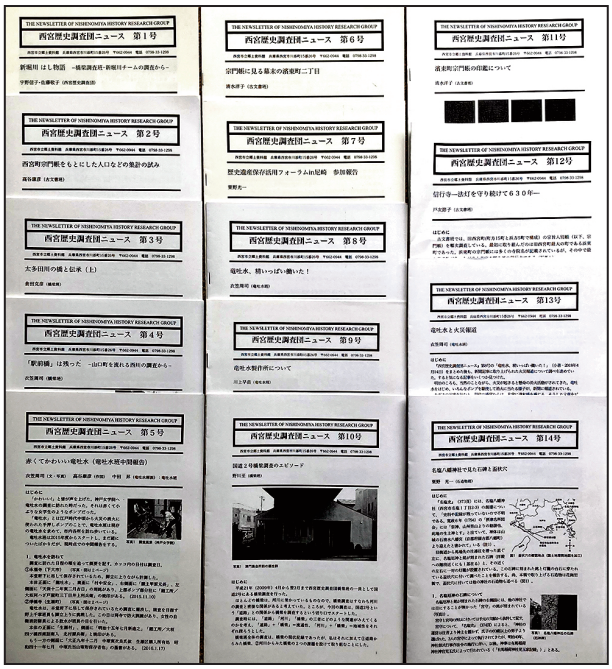
令和４年度（2022）月例会
メールマガジンの配信（19 回）と交流会及び研修会を不定期に実施した。
4 月 交流会(4/9)
6 月 研修会（古文書・くずし字解読）(6/18)
8 月 研修会（特別展示解説）(8/13)
10 月 研修会（調査写真基礎）(10/5)
12 月 研修会（調査の記録方法）(12/10)
3 月 特別研修会（収蔵資料の逸品・学芸員講座）(3/11)

令和５年度（2023）月例会
メールマガジンの配信（14 回）と展示解説会(7 回)と交流会を実施した。
4 月 アラカルト展示解説(4/15)
5 月 パネル展示・アラカルト展示解説(5/20)
6 月 アラカルト展示解説(6/17)
9 月 スポット展示解説(9/9)
10 月 アラカルト展示解説 (10/12)
1 月 アラカルト展示・スポット展示解説(1/27)
2 月 アラカルト展示解説(2/25)
3 月 交流会（活動報告・文化財検定・アラカルト展 示解説）(3/23)

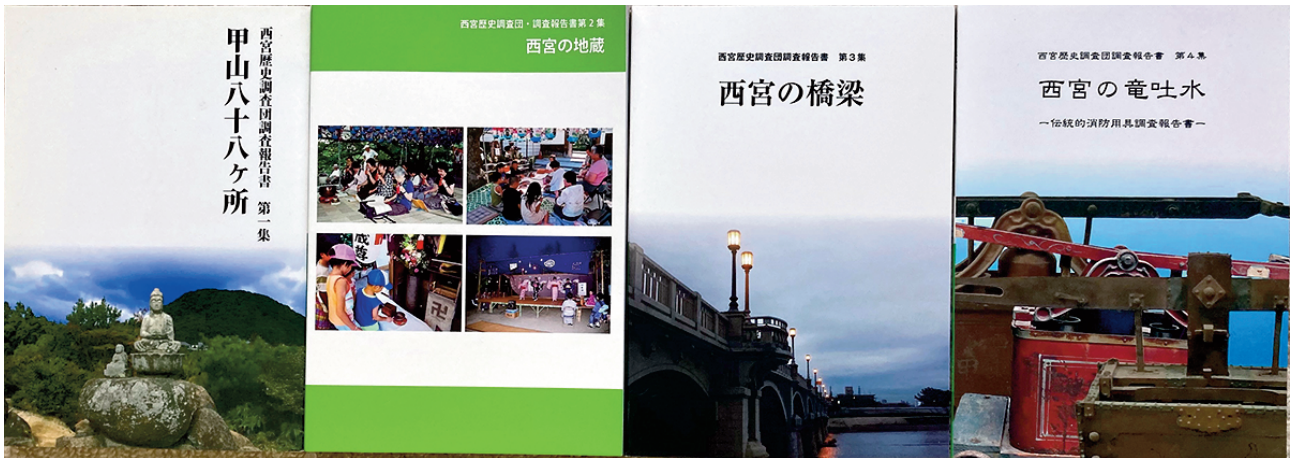
令和６年度（2024）月例会
調査団ファイナル実施にむけた、リーダー会議を実施（月１）。
5 月より第３土曜日 (5/18、6/15、7/20, 8/17、9/21、10/19)

調査団の活動を記録した刊行物

『西宮歴史調査団年報』＝年度ごとに調査団の活動をまとめたもので、2006～2019 年度版まで刊行



『西宮歴史調査団ニュース』＝調査員各個の活動発表の冊子として 2014 年から不定期発刊。第 14 号で終刊



西宮歴史調査団の活動成果を「調査報告書」としてまとめたものが上記の通り４冊刊行されている。４冊はいずれも西宮市立郷土資料館で販売されている（『西宮の橋梁』を除く）

歴史調査団　団員名簿　（2006 年～2024 年）　50音順

浅野　勝	新井　粂一郎	荒木　知	粟野　光一	石井　勇
石田　規矩子	石本　道子	井田　善久	井上　太刀夫	今井　真里子
曲江　三郎	岩本　登	牛田　孝次	内田　敬	宇野　信子
梅木　弘道	太田　順三	大野　以都美	小川　康代	織茂　武志
川上　早苗	川口　勝行	北村　正實	衣笠　周司	君野　豊子
木村　良雄	倉田　克彦	小寺　正之介	小西　佳陽子	小西　貞一郎
小西池　実	境　重美	酒井　秀一	迫田　達男	佐藤　敬子
澤田　富雄	品川　和隆	清水　貞夫	清水　洋子	鈴木　友和
須藤　久美	住本　幸博	田尾　悠夏	高谷　康彦	高橋　誠八
高橋　博己	田阪　義英	多々良　さゆり	田中　邦彦	田村　高
出口　正彦	中田　一郎	中田　昇	那須　紘一	野上　千章
野川　至	野中　知徳	早栗　悠香	原田　孝一	日高　昭夫
廣山　ちかひ	福冨　正俊	藤井　幹雄	藤田　岩夫	舩木　繁美
戸次　節子	本多　憲治	前田　一彦	益田　健司	松岡　静子
南　好廣	三松　孝也	宮内　啓三	本沢　俊紀	薬師寺　誠次
山田　敏夫	山脇　伸輔	横山　忠範	由本　新	

西宮市立郷土資料館　職員名簿（調査団担当職員）　50 音順

猪岡　叶英	衛藤　彩子	笠井　今日子	椿原　佳恵	西尾　嘉美
早栗　佐知子	俵谷　和子	細木　ひとみ	福庭　万里子	藤原　亮太
宮原　彩	森下　真企	山田　暁		

（総括）西川 卓志　　合田 茂伸

編集後記

令和６年度で 18 年活動してきた西宮歴史調査団を終了します。長い間ともに歩んでいただいた調査団員の皆様方には心より感謝申し上げます。

市民と学芸員の協働で行う文化財悉皆調査として開始した事業でしたから、終了するときも協働の事業を行いたいと模索しました。その結果が「西宮歴史調査団ファイナル―市民が熱い 10 日間 ！」です。コロナ禍を経て、調査以外の活動を知らない方もおられましたが、展示・講座・記念冊子のそれぞれの事業で、企画・調整と多くの時間を割いて関わっていただきました。

18 年といえば、人間だとちょうど成人を迎えたことになります。大人になった皆様とは、これからも郷土資料館との縁を繋いでいただき、西宮の歴史・文化財の保存と活用にご協力いただきたいと願っています。

最後にファイナル事業として、関わっていただいた皆様の名前を列記し、感謝の意とさせていただきます（敬称略・50 音順・*はリーダー）。

総括班（*川上早苗　粟野光一　高谷康彦）・展示班（*川上早苗　倉田克彦　野中知徳　戸次節子　薬師寺誠次）・記念冊子班（衣笠周司　中田一郎）・講座班(*荒木知　牛田孝次　高谷康彦　田阪義英　福冨正俊）

西宮市立郷土資料館館長　俵谷和子

ここにも街の文化財
西宮歴史調査団 活動報告書

2024 年 11 月 1 日 発行
発行者　西宮歴史調査団
西宮市立郷土資料館内
兵庫県西宮市川添町 15-26